

# 『後撰集』時代の〈本歌取り〉について

小 山 順 子

## はじめに

本歌取りの形成過程について、筆者は以前『本歌取り成立前史』（総合研究大学院大学文化科学研究科日本文学研究専攻・二〇一五年<sup>1</sup>）以下、旧稿と称す）において、三代集時代、特に『古今集』から『後撰集』にかけての時代の本歌取りの例を検討し、贈答歌の発想が大きく関わっていることを述べた。

旧稿で『後撰集』時代の〈本歌取り〉（以下、新古今時代に方法として完成した本歌取りと区別して、それ以前の本歌取りの詠法を〈本歌取り〉と記す）の例として取り上げたのが、『陽成院一親王姫君達歌合』と源順「万葉集和し侍りける歌」だった。旧稿で指摘したことで、本稿に関わることを簡略にまとめしておく。第一は、『古今集』から『後撰集』時代の〈本歌取り〉は、〈本〉として踏まえられている和歌と詞続きが重ならないよう注意が払われていることである。第二に、詞続きの重なりを避けたため、詞書や題に〈本歌〉が示されることで読者は〈本歌〉の存在およびどの歌が〈本歌〉であるかを理解し、読解に活かすことができるが、示されない場合にはそれに気づき理解することはきわめて困難

であることだ。第三に、『陽成院一親王姫君達歌合』と「万葉集和し侍りける歌」は、〈本歌〉を贈歌と見なし、それに対する返歌の体で詠まれ、題となる〈本歌〉に対する反発・切り返しの発想から詠まれたものである。〈本〉に対する切り返しに根ざして、批判を内在させつつ自身の視点や心情を対比的に強調するという方法は、後世の「本歌に贈答する体」に通じるものであり、本歌取りの原初的なものと位置づけられる。以上を踏まえると、内容面では本歌に依拠してはいても、詞の面では露わな撰取が避けられたのが『古今集』から『後撰集』時代の〈本歌取り〉だった。以上が、本稿と関わる指摘である。

本稿は、旧稿の補訂および続編に相当する。そのため、論旨の一部が旧稿と重複することを断っておく。

## 一、贈答歌と本歌取り

旧稿では、贈答歌における返歌が、贈歌に対する反発・切り返しの形で詠まれるものであり、そうした反発・切り返しが〈本〉に対する批判および自己の内省を促すことに結び付き、それが、後世の本歌取りに通じるものであると論じた。まず、贈答歌における返歌と本歌取りの関わりについて補足しておく。

本歌取りの形成過程において贈答歌における返歌が関連することについて、渡部泰明は「本歌取りの方法には、贈答歌における返歌、王朝物語における引歌、縁語、漢詩文における典故などの方法が、複合的に流入していると見られる」<sup>①</sup>『和歌文学大辞典』〈古典ライブラリー・二〇一四年〉「本歌取り」項目、傍線引用者と述べる。贈答歌における返歌がどのように本歌取りに関わっているかを具体的に論じた先行研究は管見に入らないが、両者に関わりがあるだろうことは、すでに諸氏によって指摘されている。「本歌」の用語の履歴をたどると、「証歌」と同じ意味で「本歌」が用いられている以外に、贈答歌における贈歌を指すものがあることに注意が喚起されてきた。<sup>②</sup>

源俊頼『俊頼髓脳』は、古歌との類似を戒める文脈で、贈答歌についても記している。

うたをよむに、ふるきうたによみにせつればわるきを、いまのうたよみましつれば、あしからずとぞうけたまはる。  
 (中略) これがやうによみまさむ事のかたければ、かまへて、よみあはせじとすべきなり。

うたの返しは、本のうたによみましたらば、いひいだし、おとりなば、かくしていひいだすまじとぞ、むかしの  
 ひと申ける。(中略)

歌の返に、鸚鵡返しと申事あり。かきをきたるものはなけれど、ひとのあまた申ことなり。あうむがへしといへる  
 心は、本のうたの、心ことばをかへずして、おなじことばをいへるなり、え思よらざらむ<sup>を</sup>おりは、さもいひつべし。

波線部「これがやうに」が指すのは、中略した箇所<sup>①</sup>に挙げられる例歌とその分析である。掲出箇所では、古歌との類似を忌避する意識に続けて、贈答歌における返歌について記している。両者は「詠みまし」すなわち、類似していてもより優れた歌を詠むことができればよい、という点において共通するのだが、中川博夫はそれに加え、「本歌取の詠み方は本来的に贈歌に対する返歌の詠みようにつづじるものであったことを、示唆しているのではないだろうか」と述べている。

では、贈歌に対する返歌と本歌取りが共通するのは、どのような点だろうか。また、両者の違いはどこにあるのか。本歌取りとは「周知の和歌の表現を意識的に取り入れ、新しい和歌を詠む方法」(先掲渡部執筆項目)である。一方、贈答歌における返歌は、それが意識して踏まえる和歌が、あくまで個人間でのやりとりであり「周知の」ものではない。贈歌・返歌の作者双方に、贈歌の詞と内容が共有されていれば、成立する方法である。一方で本歌取りは、本歌と新歌

の間に時間の隔たりが存在し、両者に個人的なつながりの無いところで成立するものである、というのが両者を大きく分かつ点である。とはいえ、「周知の和歌」であるかどうかと二首の間に存在する時間の幅が異なるだけで、時間的に先行する和歌の内容を踏まえ、その詞を取り入れて詠み込む点では共通する。換言すれば、本歌取りは取られる本歌に、贈答歌における返歌の場合は贈歌に、詞・内容面で寄りかかり存在するものである。詞も内容も変えずに返歌する鸚鵡返しに論が展開するのも、詞・内容の一致が見られる歌のオリジナリティーまたは存在意義を問題にする上で、避けられない話題だったからだろう。

さらに注目されるのは、『俊頼髓脳』において、贈答歌における贈歌を「本の歌」と呼んでいることである。『俊頼髓脳』以前の作品においても、「本」が贈答歌における贈歌を指し、さらにはそれが本歌取りとの類似を示唆するものがある。田中裕が「本歌」の用語の履歴を調査検討した際、「本」の最も古い用例として挙げたのが、延喜二十一年（九二二）五月『京極御息所歌合』<sup>(5)</sup>である。

『京極御息所歌合』は、同年三月に宇多天皇と京極御息所襲子が春日社へ参詣した折、大和守藤原忠房が奉った和歌二十首を「本」とし、それに対する返歌として女房に和歌を詠ませたものを番えて歌合として、判者も忠房が務めたものだった。贈歌に見立てた和歌を歌題に設定し、それに対する返歌の体で詠んだ和歌を歌合として番える『京極御息所歌合』は、萩谷朴が「返歌合」<sup>(6)</sup>・「本歌返しの歌合」<sup>(7)</sup>、峯岸義秋が「本歌取り形式の歌合」<sup>(8)</sup>と名付け、特殊な形式の歌合として注目している。萩谷は「本歌合が抽象的な季節や風物、もしくはは詞句を題とせず、贈呈の和歌一首をそれぞれの題とした返歌合の最古のものとして、歌合の歴史に占める大きな意義をも見逃がすことは出来ない」<sup>(9)</sup>と指摘している。この『京極御息所歌合』の返歌合の形式を襲用して催されたのが、旧稿で取り上げた『陽成院一親王姫君達歌合』だった。菊地仁は『京極御息所歌合』について、「本（歌）」という形で歌合における題詠が贈答と同一視できる構造を有す

る点にだけは留意しておかなければならない」と述べる。但し『京極御息所歌合』は、忠房の和歌献上から歌合まで二月という時間を隔ててはいるが、「本（歌）」を詠んだ忠房を前にして返歌を詠み、さらにはそれに評価を付す判者も忠房が務めているので、実際の贈答歌としても機能している。一方の『陽成院一親王姫君達歌合』で「本」とされたのは、仮名日記序文に「あきのはてのこゝろあるふるうた」とあるように、歌人および主催者の陽成院とは何ら関わりを持たない、また時間的にも「古」と意識された古歌だった。それゆえ、『陽成院一親王姫君達歌合』では『京極御息所歌合』よりも、贈答歌の形式を借りた題詠という構造がより明確に顕在化している。

また、『陽成院一親王姫君達歌合』は天曆二年（九四八）九月十五日に催されたものである。つまり、『陽成院一親王姫君達歌合』が行われたのは『後撰集』成立の三年前であり、『後撰集』撰集下命者・村上天皇の御世だった。また、本歌に対する返歌の体で詠まれた源順「万葉集和し侍りける歌」も旧稿で取り上げたが、作者・源順は『後撰集』の撰者の一人である。このような返歌合または本歌に対する返歌という発想が生まれた背景は、『後撰集』および同時代の贈答歌の有り様とも深く関わっている。

贈歌に対する返歌の応じ方の原則は、①贈歌と共通する表現を用いること、②贈歌に反発する内容で詠むこと、の二点であることが久保木哲夫・増田繁夫によって指摘されている。<sup>①</sup>①については、贈歌と共通する表現を用いることが、心情イメージの共有に重要であるからだ。②については、これは歌垣以来の伝統において、男女間における恋愛贈答歌が、男性からの贈歌に対して女性が反発を示すことで、相手を圧倒し合うように互いの心情を吐露し、また機知的・遊戯的な挨拶となることに根ざしている。<sup>②</sup>こうした贈答歌の基本が完成したのが、『後撰集』時代だったことも、久保木・増田が指摘している。

なお、贈答歌の形式が後撰時代に確立しただけではなく、『後撰集』は贈答歌に対する関心が非常に高い勅撰集だった。

『古今集』から『後撰集』へ、入集する贈答歌の歌数は、一九組三八首から一八八組三八一首へと激増し、『後撰集』において贈答歌に対する関心が非常に高いことが指摘されている。<sup>13)</sup> 贈答歌が洗練され、その形式が完成されていたことが、贈答歌に対する返歌の技術を問う『陽成院一親王姫君達歌合』・源順「万葉集和し侍りける歌」の背景にあると考えられる。

## 二、引歌に対する返歌

さて、『陽成院一親王姫君達歌合』および源順「万葉集和し侍りける歌」は、古歌に対する返歌の体で詠まれたものだった。但し、古歌に対する返歌という形式は、単なる文芸上の試みにとどまらない。題詠のみならず実詠においても用いられる詠法だったことが、『後撰集』から窺われる点に注目されるのである。

『後撰集』に次のような例がある。

- ① 「はるさめのふらば思ひのきえもせでいとゞなげきのめをもやすらん」といふふるうたの心ばへを、女にいひつかはしたりければ

もえ渡る歎は春のさがなればおほかたにこそあはれとも見れ

(『後撰集』春中66読人不知)

詞書に引かれる和歌は出典未詳であるが、「古歌」とあるので、当時伝わっていた古歌であったのだろう。「思ひ」に「火」、「嘆き」に「投げ木」、「燃やす」に「萌やす」を掛けており、春雨が降っても「思ひ」の「火」は消えるどころか、いっそう「嘆き」を「投げ木」として、木の芽を「萌やす」ように火を「燃やす」のでしよう。という歌意である。

この古歌を引用することで、男は女に、自身の嘆きを伝えた。それに対して女は、<sup>レ</sup>投げ木が一斉に萌えるのは春の性質ですから、嘆きの思いの火を燃やしているあなたのことも、一般論としてお気の毒に思います」と返した。

このように、古歌を引き寄せて自身の状況や心情の表現として用いる「古歌誦詠」が『万葉集』から見られるものであり、これが引歌の常為につながることを、渡部泰明が指摘している。渡部は「古歌誦詠」から類歌を経て、本歌取りの問題へと結びつけているのであるが、贈答歌の面からも、こうした古歌利用が、それに対する返歌を促すものであり、古歌を「本」と見なして和歌を詠作するという詠歌方法へと展開するものであったという点に注目したい。

さらに、折や場に即した古歌の誦詠は、古歌の知識が共有されることで、全文ではなくその一部のみを引用した引歌の技法にも展開する。引歌とは、和歌の一部を引用することにより、それを発した側と受け手との間に和歌の全文と内容を想起させて、コミュニケーションを成立させる技法である。『後撰集』には、①のように古歌の全文を引く形ではなく、一部のみを引用する形で詞書に示されるものが多い。

② ふみつかはしける女のは、の、「こひをしこひば」といへりけるが、年ごろへにければつかはしける

たねはあれど逢事かたきいはのうへの松にて年をふるはかひなし  
〔『後撰集』恋四 807 読人不知〕

詞書に見える「こひをしこひば」は、次の和歌の第四句である。

たねしあればいはにも松はおひにけり恋をしこひばあはざらめやも  
〔『古今集』恋一 512 読人不知「題しらず」〕

この古今歌を引歌として「女の母」が男に意を伝えた。引用されている「恋をしこひば」は「一途に思い続けていれ  
ば」の意で、その部分だけでは、一途に思い続けていれどなるのか、ということまでは分からない。引歌として用  
いられている古今512番歌の歌意は、「種さえあれば、堅い岩の上にも松は生い育つ。一途に思い続けていれば、逢え  
ないなどということはない」である。すなわち、古今歌を引歌として「女の母」が男に伝えようとした意は、一途に  
娘のことを思ってくださいさるのなら、いつか逢わせてあげますよ」ということである。男も、引歌の全文を喚起して、女  
の母が伝えようとした趣旨を理解したことが、男の詠んだ歌に表れている。

女の母が「恋をしこひば」と伝えたものの、そのまま年月だけが過ぎた。男はそこで、807番歌を「女の母」に送った  
のだった。「種があつて（一途に思い続けて）もお嬢さんに逢いがたく、堅い岩の上の松のように「待つ」だけで年月  
が経ってしまうのは、甲斐の無いことですよ」の意である。「種しあれば」と仮定条件で提示された内容を敷き、種は  
あるけれど」と返した。「恋をし恋ひば」という句から、引かれた和歌が何であるかを理解し、歌の全文を喚起した上で、  
引用されなかった部分にある「種しあれば」「岩」「松」を用いて、切り返しの体で約束の不履行を嘆いたのだ。母から  
の文には古今512番歌の全文が引用されていたのかもしれない。しかし、少なくとも『後撰集』のテキストでは一句のみ  
が引用されており、それだけで一首全体が想起できるという前提を取っている。

『後撰集』には、このように詞書に先行和歌の一部が引かれ、その引歌に対する返歌として詠まれた和歌が、②を含  
め全五例見いだせる。

- ③ せうそこつかはしける女のもとより、「いなぶねの」といふことを返事にいひ侍ければ、たのみていひわたり  
けるに、猶あひがたきけしきに侍ければ、「しばしとありしをいかなれば、かくは」といへりける返ごとにつ



かはしける

流よるせゞの白浪あさければとまるいな舟かへるなるべし

返し

三条右大臣

もがみ河ふかきにもあへずいな舟の心かるくも帰なる哉

(恋四 838・839)

もがみ河のぼればくだるいな舟のいなにはあらずこの月ばかり

(『古今集』東歌 1092 陸奥歌)

④ 女のもとにおとこ、「かくしつ、世をやつくさむたかさこの」といふ事をいひつかはしたりければ

高砂の松といひつ、年をへてかはらぬ色ときかばたのみむ

(恋四 864 読人不知)

かくしつ、世をやつくさむ高砂のおのへにたてる松ならなくに

(『古今集』雑上 908 読人不知「題しらず」)

⑤ あひしりて侍ける人のもとにひさしうまからざりければ、「忘草なにをかたねと思しは」といふことをいひつ

かはしたりければ よみ人しらず

忘草名をもゆ、しみかりにてもおふてふやどはゆきてだに見じ

(恋六 105)

寛平御時御屏風にうたか、せたまひける時、よみてかきける

忘草なにをかたねと思しはつれなき人の心なりけり

(『古今集』恋五 802 素性法師)

⑥ 女ともだちの、つねにいひかはしけるを、ひさしくとづれざりければ、十月許に、「あだ人の思ふといひし事のは、」といふゝることをいひかはしたりければ、竹のはにかきつけてつかはしける よみ人しらず  
うつろはぬなにながれたるかは竹のいづれの世にか秋をしるべき  
(雑四 1272)

↓  
女のもとに

いで人のおもふといひしことの葉はしぐれと、もにちりやしぬらん (『兼輔集(冷泉家時雨亭文庫藏資経本)』76)

③は、引歌に対する贈答ではないが、引歌の「稲舟の」を一貫して踏まえた贈答歌となっているので含めた。女からの返事「稲舟の」は、古今<sup>1092</sup>番歌において「稲舟の」が同音反復で「否」を導き、「否にはあらずこの月ばかり」という下句が一首の趣旨を表すことを踏まえている。つまり女は、古今<sup>1092</sup>番歌を引歌とすることで、それと同じく「否」ではないのですが、今月は都合が悪いのです」という意を伝えたのだ。しかし女に会えないまま時間が経ったことについて、三条右大臣・藤原定方が女を詰った。すると女は、以前引歌として用いた「稲舟の」を用いて「否にはあらず」と伝えたことを前提としつつ、「流れて寄ってきた瀬々の白波が浅いので、停泊していた稲舟は帰ってしまったようです——あなたのお心が浅いので、受け入れるつもりでいたけれど私の気持ちも翻ったようです」と、気が変わったのは定方の心の浅さゆえだと詠んだ。

④は「かくしつづ世をや尽くさむ高砂の」の箇所を引用し、このように過ごしながら人生を終えるのだろうか」と

いう嘆きを直接的に表すが、引用されなかった部分にある「松ならなくに」を想起すれば、松でもないのに、待ち続けているという意が含まれていると解せる。それに対して女は、「高砂の松のように『待つ』と言いなながら年月が経つて、それでも色が変わらない——あなたの心が変わらなとお聞きしたなら、将来を期待しましょう」と返した。初二句「高砂の松といひつつ」は、引歌の「高砂の」に続く引用されていない箇所「尾上に立てる松ならなくに」までを踏まえて、高砂の松でもないのに、とあなたはおっしゃるけれど」と、引歌の否定表現を切り返した表現となっている。

⑤は、女のもとへ長らく訪れなかったところ、相手の女から「忘れ草何をか種と思ひしは」と送られてきた。これは「忘れ草は一体何を種とするのかと思つていましたところ」の意で、謎かけの体を取っている。果たして何を種とするのか、答えは引歌の下句「つれなき人の心なりけり」すなわち薄情な恋人の心である。女が男に伝えたい趣旨も、この下句にある。「あなたは私のことを忘れてしまったようだけれど、忘れ草とは何を種にするものだったかしら——薄情なあなたの心ですよ」と伝えようとしているのだ。それに対して男は、「忘れ草とは名前も不吉なものだから、その忘れ草を『刈り』にだとしても、仮初めにも忘れ草が生えているという宿には行って見ようと思いませんよ」と答えた。女が用いた「忘れ草」を一首の中心に据えながら、忘れ草が生えたというのは、自分が女を忘れたのではなく、女が自分を忘れたからだと切り返している。

⑥は「あだ人の思ふと言ひし言の葉は」も、いい加減な人が「あなたを思っています」と言った言葉はの続き、「時雨とともに散りやしぬらん」つまり今は十月、時雨とともに散るようにむなしくなってしまったのでしょねが伝えたい趣旨である。

②～⑥のやり取りは、それぞれ、引用箇所よりもむしろ引かれなかった部分にこそ相手に伝えたい意がある。だからこそ、引用された句がどの和歌の一部であるのか、そして全文は何であるのか、何を意味するのか、贈答の双方に共

有されていなくては成立しない。引歌と本歌取りの問題とも関わるものであるが、引歌が自身の心情表現として用いられた上に、それに対して返歌が詠まれることで、結果として返歌は、引歌に対する返歌の体となっている。自身の状況や心情と重ね合わされる前代の和歌を介した贈答が歌人の現実の位相でも行われていたという点は、古歌に対する返歌を詠むという『陽成院一親王妃君達歌合』『万葉集和し侍りける歌』の発想の背景としても考え合わせる必要がある。

但し、本歌取りとの関わりという視点から見ると、②～⑥は引歌との贈答の体であるが、後世の本歌取りと比較すると、〈本〉の歌との詞の重なりは少ない。引歌において一首の中心となる題材を軸として和歌が構築されているとはいえず、詞書に引歌が示されていなければ、踏まえられた和歌が何であったのか気づけないだろうものも多い。引歌との詞の重なりが多い②、また「いな舟」という特徴的な題材を詠む③は、踏まえられた古今歌を想起することはできるが、④～⑥は、詞書による情報が無ければ、何を念頭に置いた和歌であったのか理解することは困難であると思われる。引歌の利用は贈答の上での機知にとどまっておらず、その意を汲んで返歌を詠んでも、引歌の表現を本格的に襲用して自身の詠（返歌）に活かすということは、ほとんど行われていない。

なお、散文作品における引歌の発生と展開については、村川和子の調査と整理がある。村川は、『伊勢物語』『土佐日記』において引歌が用いられ始めるが、この段階ではまだ地の文にしか引歌は登場せず、『宇津保物語』『落窪物語』に至って、引歌は数量が増加するだけでなく、会話文・消息文に用いられるようになることを指摘している。十世紀末に成立の『宇津保物語』『落窪物語』において、会話文・消息文に引歌が用いられる例が登場するのは、九五一年成立の『後撰集』に引歌を用いた贈答歌が見出だせることと照応する現象である。現実の生活でのやり取りにおいて引歌を介したコミュニケーションが増えたことが、散文作品における引歌の増加につながっていると考えられる。

三、村上天皇後宮の贈答と『古今集』

①～⑥の例から、古歌との贈答が現実においてもなされていたこと、但し、返歌は内容では確かに古歌の引用とその意味・意図を理解して詠まれたものであるが、表現にはさほど活かされていないことを見てきた。古歌を引用した贈答において、本格的に表現を踏襲して詠んだ返歌が見出だせるのは、『後撰集』撰修下命者である村上天皇後宮である。

⑦ 六月のつごもりに給へりける御返しを、桔梗につけて、「秋ちかう野は成にけり、人の心も」ときこえ給へり  
ければ

↓  
秋ちかうなるもしらず夏の、にしげる草葉とふかき思は  
(『村上天皇御集』16)

↓  
きちかうのはな

あきちかうのはなりにけり白露のをける草ばも色かはり行  
(『古今集』物名440紀友則)

⑧ うへより、「まじをはにあれや」ときこえ給へる御返しに  
なれゆけばうきめかればやすまのあまのしほやきころもまどをはなるらん  
(『齋宮女御集』84)

↓  
すまのあまのしほやき衣そおさをあらみまどをはにあれや君がきまさぬ  
(『古今集』恋五758読人不知「題しらず」)

他にも引歌を介した贈答<sup>17</sup>はあるが、端的な例として二例を挙げた。また⑦⑧ともに、後に村上天皇からの返歌が続くが省略する。

二首とも村上天皇からの引歌に対して、斎宮女御・徽子が返したものである。⑦の「秋ちかう野はなりにけり」は古今440番歌の初・二句、⑧の「まどをにあれや」は古今758番歌の第四句を引用したものである。

特に⑦の「秋ちかう野は成りにけり」を引いた文は、桔梗の花に付けられている。「秋ちかう野はなりにけり」は、詞書にあるように「六月のつごもり」に送られたものだから、季節にも合致している。それだけではなく、古今歌は「きちかうのはな」を物名として詠み込んだ歌だったから、村上天皇はそれをも踏まえて桔梗の花に付けたのだ。また引用されているのは初・二句のみであるが、それに加えて「人の心も」と記されている。これは、古今440番歌の下句にある「草葉も色変はりゆく」を踏まえ、「あなたの心も変わったのでしょうね」という意を暗に示したのだ。それに対して徽子は、「秋が近くなったとも分かりません。夏野に繁る草葉と、草葉のように深くお慕いする思いは変わらないのだ」と返した。村上天皇が引歌に託した意を十分に理解した上で、草葉も、私の心も、秋が来たなど気づかないくらいに変わらない」と切り返したのだ。

⑧では、まず村上天皇は古今758番歌の第四句を引いて徽子に贈った。これが意味するところは、私たちの間にも隙間があいているのだろうか」という嘆きである。それに対して徽子は、「馴れてゆくと飽きがくるのは憂き世の常なので、須磨の海人の塩焼き衣の織り目が粗く隙間が空いているように、あなたにお目に掛かることが間遠なのでしょうか」と返した。

徽子の返歌は、いずれも贈歌として引用されている本歌の「秋ちかう」「須磨の海人の塩焼き衣」を句の単位でそのまま用いていることに注目される。贈答歌が贈歌の表現の一部を用い、それを軸として返歌を構成するのが基本であるこ

とを考えれば当然とも言えるが、旧稿で指摘した、『陽成院一親王姫君達歌合』や源順「万葉集和し侍りける歌」が句の単位では本歌と詞が一致していなかったのとは対照的だ（この点については後述する）。しかしこれは、村上天皇と徽子の和歌が現実のやり取りにおいて交わされたものだったという見方からすると、相手が何の歌を踏まえ、どのような意を発したのかを、自分が受け取め理解できたと示すためには、踏まえられた和歌が何なのかはつきり分かるように返さなくてはならない。矛盾を抱えた言い方になるが、確実に、ほのめかす必要があるのだ。そのために、後世の本歌取りのような一句引用が用いられた、もしくは用いる必要があったと考えられる。前節で取り上げた①⑥とは異なり、⑦⑧は新古今時代の本歌取りと類似したものとなっている。定家の本歌取り準則「昔の歌の詞を改めずよみすゑたるを、即ち本歌とすと申すなり」（『近代秀歌』）に、さらには「取古歌詠新歌事、五句之中及三句者頗過分無珍氣、二句之上三四字免之」（『詠歌大概』）という本歌との一致の上限規定にも適っているのだ。

なお、徽子が村上天皇に入内したのは天曆二年（九四八）十二月三十日のことである。村上天皇との贈答歌も、『後撰集』が撰進された後のものであった可能性が高い。杉谷寿郎<sup>18</sup>は、『後撰集』には村上天皇後宮からは一首も入集していないことを指摘し、『後撰集』が後宮が楽しむために撰集された歌集であったと考察している。そのように考えると、『後撰集』に見出だせる引歌を介した贈答歌が、より表現を洗練し完成度を高めたものが、村上天皇と徽子の贈答だったと位置づけられよう。

受け手はまず、引歌として投げかけられた古歌の詞の全容を喚起する。そして、やり取りには引用はされておらずとも、引歌に用いられていた詞を導き出して、自身も返歌に詠み込み利用する徽子の和歌の作り方は、村上天皇からの投げかけを理解するだけでなく、自身の和歌にも古歌の表現を取り入れたものである。旧稿で取り上げた『陽成院一親王姫君達歌合』・源順「万葉集和し侍りける歌」は、題として用いられた〈本〉が何であるかの情報が無いと、踏まえ

られたものに気づくのが困難であったが、徽子の村上天皇への返歌は、一首だけを見ても踏まえられた〈本〉が理解できる。発想や内容のみならず、表現にも〈本歌〉が踏まえられる徽子の段階に至ると、贈答歌における返歌において、贈歌に古歌が引用される(全体・一部を問わない)場合、その表現方法は後世の本歌取りと同様のものとなっている。後世、本歌取りの分類に「本歌に贈答する体」が立てられるが、まさしくそれが現実での贈答において発生している。贈答歌における返歌が本歌取りの形成過程に関わることを端的に示すものである。

なお付言すると、ここで注目したいのは、①⑧の詞書に引用される和歌は、①⑥以外は『古今集』所収歌であるという点だ。これは、人々がやりとりをする際に引歌として用いた和歌の代表が、『古今集』であったことを物語る。初人の勅撰和歌集『古今集』が編纂されたことで、特に『古今集』が後撰時代に知識・教養として重要なものとなり、個人人の知識の範囲を越えて人々の間で共有されるようになったことを示している。

それはたとえば『枕草子』二〇段「清涼殿の丑寅の隅の」において、定子が紹介するエピソードからも窺われる。村上天皇の宣耀殿女御・藤原芳子が、父・師尹から「さては古今の歌廿巻を、みなうかべさせ給を御学問にはせさせ給へ」と訓育されていたことを聞いた村上天皇が、覚えていのかどうか芳子を試したところ、最後まで間違うことがなかったという話だ。

師尹が芳子にとつて『古今集』が必要な知識であると暗誦させたのはなぜか。上坂信男<sup>19)</sup>は、作歌の規範を修得するためという目的を挙げつつも、「今一面の、そしてさらに重要な、本質的な「学問」の意味があったのではないか、と思われる。(中略) およそ、教養とは知性の開発にほかならない。(中略) 他人の経験と感情を知り、人の心を推量するとの規矩にするという積極的な効用もたらされる。和歌学習を掲げた師尹の意図もここにあったのではないか」と論じている。上坂が述べるような、知性の開発、他人の経験・感情への理解といった学習意図があったらうことには、



基本的に首肯される。

加えて⑦⑧のように『古今集』歌の引用を契機とする贈答歌のやり取りが村上天皇後宮で行われていたことを顧みれば、宣耀殿女御・芳子にも同様の知識と機知が求められたと見てよい（但し芳子関連の和歌でこうした引歌による贈答歌は見られない）。『古今集』所収歌の引用を介した贈答歌は、後宮女性の知識・機知が試され、發揮されるものであったと考えられる。そして、こうした『古今集』歌を引用した贈答が、村上天皇後宮にとどまらず行われていたことが『後撰集』所収歌から窺われるのである。<sup>20</sup>『後撰集』時代の後宮および社会に、引歌として『古今集』が用いられているということは、前代の勅撰和歌集である『古今集』の和歌が、社交の上でも必須となる知識であったことを物語っている。

#### 四、『後撰集』時代の〈本歌取り〉への評価

徽子の和歌に見られる〈本歌〉からの本格的な表現の摂取利用を、『後撰集』時代の古歌を用いたコミュニケーションの洗練・完成されたものと考えてきた。但しこの点については、そもそも『後撰集』では、読者と知識基盤を共有しつつ、それを利用して自詠を詠む〈本歌取り〉が見えること、およびその評価についても考え合わせねばならない。

『後撰集』に〈本歌取り〉が多いことを指摘したのは、片桐洋一<sup>21</sup>だ。片桐は、『後撰集』に『古今集』および既存和歌の表現を踏まえた歌が多いことを指摘し、方法をA～Eの五種に分類している。A種は二・三句を利用したもの、B種は一語一句のみの利用で言葉を借りただけのもの、C種は明らかに本歌を意識し、本歌と切り離しては考えられないもの、D種は一首の全体ないし部分の内容を一つの語句に凝縮したもの、E種はD種をさらに凝縮して新しい単語を造るもので、本歌に全面的に依拠しつつも独立したものである。ここで特に問題としたいのが、C種である。

片桐がC種として挙げた例のうち、一例を取り上げる。

⑨ ひさしうとはざりける人の、思いで、  
 「こよひまうでこん、かどさ、であひまで」と申て、までござりけ  
 れば  
 よみ人しらず

やへむぐらさしてし門を今更に何にくやしくあけてまちけん

〔後撰集〕恋六 1055

↓

今更にとふべき人もおもほえずやへむぐらしてかどさせりてへ

〔古今集〕雑下 975 読人不知

⑨は題材・表現を本歌から摂取するのみならず、はつきりと本歌の文脈を踏まえて詠まれた歌である。恋人から「今宵訪ねよう、門を閉じずに待っていてくれ」と言われたから開けて待っていたにもかかわらず、やはり来なかつたという状況が詞書に記される。歌意は「門を八重葎で閉じていたのに、今更どうしてこんな悔しい思いをするのに開けて待つてしまったのだろうか」である。「八重葎鎖してし門」は、本歌の第四句「八重葎」と結句「門鎖せり」を襲用した表現である。但し、この「八重葎で門を閉ざす」という行為は、本歌の上句「今更に問ふべき人も思ほえず」という箇所を踏まえたものである。つまり、「八重葎鎖してし門」という詞に、「今更私を訪ねる人があるとは思われない」という文脈が籠められ、諦めと覚悟を持っていたことを暗に示しているのだ。本歌によって、「今更私を訪ねる人があろうとは思えないから八重葎で門を閉じている」という文脈があつてこそ、「今更に何にくやしく開けて待ちけむ」がある。上句「八重葎鎖してし門を今更に」は、状況説明であるとともに、本歌を喚起する役割も担っている。⑨のようなC種の〈本歌取り〉は、〈本歌〉の発想や表現を利用しつつ、〈本歌〉を喚起してその文脈を踏まえながら読解することを求めるものである。

但し片桐は、このような『後撰集』に多用される〈本歌取り〉が、言葉中心の取り方であり、またそれは素人の和歌

の集成であるからだと論じている。片桐は、『後撰集』が藝の歌を集成する勅撰集であり、私的な場における和歌が会話的性格を持つことから、対者と共通した知識を前提とし、対者に理解されることがすべての前提となるために、既存和歌に全面的・部分的に依拠することが多く、発想が一般的・類型的・非個人的であると述べる。作者・読者の共有する知識基盤に基づいて詠まれた『後撰集』の〈本歌取り〉は、「ハーフメイド」の和歌である、というのが片桐の指摘だ。片桐が指摘する『後撰集』和歌の方法は、『万葉集』に見出だせる類歌に通じるものである。類歌とは、作者の個人・個性ではなく、個人的なものの母胎としての歴史的な共同体の性格を持ち、社会の同質性を示すものである。<sup>(22)</sup>さらに、類似語句を取りこむことにより、その言葉に導かれて歌を詠むことができる表現形式だ。<sup>(23)</sup>『後撰集』に見られる非個人的・類型的な詠歌は類歌と重なる部分が大きいと考えられる。しかしC種のような、特定の先行歌を踏まえ、その表現・文脈を利用し、受け手（読者）にもそれを喚起した上での読解を求める〈本歌取り〉は、類歌の枠に収まるものではない。前節まで、古歌との贈答をめぐる、本歌取りと贈答歌における返歌との関わりを検討してきた。しかし贈答歌のみならず、『後撰集』時代にはすでに〈本歌取り〉の発想があり、詠歌方法として広まっていた。露わに〈本〉から表現を撰取することで〈本歌〉を喚起させ、詞書や題による情報が無くとも読者に〈本歌〉を踏まえた理解・読解が可能な〈本歌取り〉が存在していた。類歌の延長線上にありつつも、そこからさらに踏みこんだ〈本歌取り〉も、同時代に展開していたのである。⑦⑧の徽子の和歌表現については、贈答歌としての洗練だけでなく、こうした『後撰集』時代の表現傾向も合わせ持つものとして位置づけられる。

但し、新古今和歌の本歌取りが作者の独創性の発露として評価されるのは逆に、『後撰集』の〈本歌取り〉が「ハーフメイド」と評されるのはなぜか。またこうした評価は片桐個人のものでなく、広く認められるものなのか、それを考える上で、『後撰集』の成立から約半世紀を隔て、『拾遺集』時代の代表歌人である藤原公任の『新撰髓脳』の次の記述

古く人の詠める言葉をふしにしたるわろし。一ふしにてもめづらしき詞を詠み出でむと思ふべし。古歌を本文にして詠めることあり。それは言ふべからず。惣じて我はおぼえたりと思ひたれども、人の心得難きことはかひなくなむある。昔の様を好みて今の人ことに好み詠む、われひとりよしと思ふらめど、なべてさしもおぼえねばあぢきなくなむあるべき。

(『新撰髓脳』)

先行歌からの表現摂取および〈本歌取り〉に関する警鐘だ。公任は、人が詠んだ詞を目立つように詠むことは良くない、珍しい詞を詠出しようと思わなくてはならないと述べる。「古く人の詠める言葉をふしにしたるわろし」というのは、『後撰集』に既存和歌の表現を摂取・利用した和歌が散見したことによく当てはまる。直近の勅撰和歌集である『後撰集』に、先行歌の特徴的な詞続きを摂取した和歌が多数入集していることは、半一世紀後に活躍した公任（公任は九六六年生、一〇四一年没）にとって看過しえない、オリジナリティの欠如と映ったのではなかったか。『後撰集』のような詠法が良しとされないようにという抑止の意図もあったのかもしれない。

しかし一方で、『後撰集』時代の〈本歌取り〉には、『陽成院一親王姫君達歌合』『万葉集和し侍りける歌』に見いだせるように、〈本〉として踏まえた和歌の詞続きを踏襲しないという方向性もあったことにも、改めて注意される。『陽成院一親王姫君達歌合』においては、題に「本」として、贈答歌の贈歌に相当する和歌が示されているから、踏まえられた〈本歌〉が何か分かるが、それを示さない源順の「万葉集和し侍りける歌」は、どの歌を〈本歌〉にしているのか不明瞭だ。詞書に示されて初めて踏まえられた〈本〉の歌がわかるような後撰時代の本歌取りは、やはり『新撰髓脳』

の提出箇所「古歌を本文にして詠めることあり」以下の記述に合致する。公任は、本歌を踏まえて詠む方法は、作者だけでなく、読者も同じように理解できないと独りよがりになると警鐘を鳴らしているのである。〈本〉が何であるか読者が理解できないような〈本歌取り〉は、作者の意図や詠歌内容が十分に伝わらないのだ。

公任の『新撰髓脳』の掲出箇所は、〈本〉の詞統きを露わに取ってはオリジナリティーが欠如し、それを避けると詞書や題の情報が無いと〈本〉に気づけないという、『後撰集』時代の〈本歌取り〉が抱えた問題を浮かび上がらせているように思われる。

では、同時代の〈本歌取り〉において、このように相反する方向性が存在するのはなぜか。

それは、「ハーフメイド」・オリジナリティーの欠如と評価されるような後撰的〈本歌取り〉が、基本的に即時性・贈答と分かちがたく結びついたものだったからだと考えられる。『後撰集』における〈本歌取り〉の例には「題しらず」も含まれており、すべてが社交の具として詠まれたものだったかは分からない。とはいえ、『後撰集』において〈本歌取り〉が多数入集することは、撰者をはじめとする当代専門歌人の詠を採らず、素人や権門歌人が多く入集し、褻の歌を中心とする歌集であるという『後撰集』の性質を背景にするものと考えられる。恋愛を主とする私的なやり取りにおいて、既知の和歌を媒介として自身の状況や心情を表現し、その内容理解が作者と受け手双方に共有された時に生じる面白さは、コミュニケーションとしては強い意味を持つ。発せられた和歌が何を踏まえたものなのか・何に依拠しているのか、受け手に理解されないとコミュニケーションが成立しない。そのため、踏まえられた〈本〉をはつきり分かるように示す必要があった。オリジナリティーの欠如と見なされるような、一句ないしは複数句の引用を代表とする露わな詞の撰取は、コミュニケーションという視点からは、和歌の相互理解において有益だった。さらには、そうした既存の和歌を場に応じて即座に引用できる機知も、作者の手腕として評価される。また、〈本歌取り〉歌の意味・意図するところを正

しく理解できることが、当時の教養として求められてもいた。作者・受け手（読者）が同等・同質の知識を有する者同士であるという連帯意識も強まる。こうした和歌の評価は、その和歌を引用する（場）、機知を發揮する即事性、受け手が誰であるかが明確なコミュニケーションと強固に結びついたものであったと考えられる。

であるならば、古歌に対する返歌を詠むという形式のもとに詠まれた『陽成院一親王姫君達歌合』『万葉集和し侍りける歌』で、詞続きまで踏襲するような露わな表現撰取が避けられたのは、コミュニケーションの場から切り離された題詠だったから、という見通しが立つ。主題や個々の歌ことばを一致させ、対応を示しつつ切り返すにとどまっているのは、和歌一首の出来が問われる題詠においては、露わな表現撰取・利用がオリジナリティーの欠如と見なされる詠歌方法だったからだと考えられる。歌合の場において古歌との一致が批難された一方で、状況に応じた古歌の利用は評価されたことを佐藤明浩<sup>24</sup>が指摘しているが、これは歌合のみならず題詠一般にも敷衍しうる評価指標である。古歌との一致は、それを引用する状況と不可分だったが、『後撰集』時代の和歌の詠歌方法だった。

### 結びに

『後撰集』時代の〈本歌取り〉は、状況と不可分の詠歌技法であり、同質の教養を基盤とした相互理解を生むという面において、コミュニケーションの上では評価される一方で、オリジナリティーの欠如した「ハーフメイド」の方法だった。しかし、同様の方法が用いられた新古今時代の本歌取りは、作者のオリジナリティーとして評価される。両者の評価が真逆であるのはなぜだろうか。

藤平春男<sup>25</sup>は、定家の本歌取りについて「単に豊かなイメージを持つ歌詞を用いるというのではなく、完成した一首を想起させる」ものであると論じた。特定の本歌を踏まえ、本歌の内容を新歌の背景として二重映しにする複雑さが本歌

取りの要件であるならば、『後撰集』時代の〈本歌取り〉は、少なくとも第三・四節で取り上げた⑦～⑨や片桐の分類するところのC種については、本歌の詞・表現を用いることで、本歌の一首全体を想起させるものであり、この要件にはあてはまっている。

では、新古今時代に完成した本歌取りとどこが異なるのか。踏まえられ引用される古歌が、歌人と受け手（読者）に知識として共有され、その内容を想起した上での読解が前提とされているかどうか、という問題にとどまらず、古歌に対する規範意識の有無にあると考えられる。松村雄二は、新古今時代の本歌取りが古歌との競合意識を越えて、「全体として古今伝統の再生ということを本旨として成立しているとすれば、この古歌との意識的な表現連繫を梃子とする本歌取りの手法こそは、伝統再生のための最も直線かつ有効的な方法」だったと論じる。川平ひとしは、〈もと〉という概念の中に、①懐旧と尚古、②〈本―末〉の価値観、③〈古・旧〉〈今・新〉の共在と拮抗、④〈今〉〈新〉に対する批判と否定、⑤〈本への回帰〉と〈新しい価値の創出〉との相克、があることを指摘した上で、本歌取りを完成させた定家において「本歌は直ちに古歌・旧歌と同一ではなく、また同次元に並ぶものでもない」と述べる。これらの指摘を踏まえると、新古今的な本歌取りとは、本歌を、単なる先行和歌・既知の和歌としてのみならず、古典的世界に自己を投企するための媒介として捉えているということになる。こうした本歌に対する意識を基盤とすることで、本歌取りは模倣や非個人的な「ハーフメイド」の和歌ではなく、積極的に評価される新たな詠歌方法として確立したのである。

『後撰集』時代は、『古今集』という初の勅撰和歌集の成立を経て、先行する著名和歌を作者・読者の双方で共有できる知識基盤が形成されていた。『古今集』入集歌とは、初の勅撰和歌集に収められた著名な和歌であり、宮廷社会において教養として必要な知識となっていたのである。さらに、『古今集』入集和歌は、単なる先行和歌というだけでなく、勅撰和歌集に入集した優れた歌として、引用されるにふさわしい表現と内容を持つものであるという保証もあった。

そうした位置づけのもとに引歌に用いられたり、「本」として題詠に用いられた。

本稿の冒頭に述べたように、「本（歌）」の古い例として注目される『京極御息所歌合』『陽成院一親王姫君達歌合』において、「本」は、贈答歌における贈歌の意であり、踏まえて詠む歌、時間的に先行する歌、という意は持つが、古典意識・規範意識は持たない。『古今集』が規範・古典であると明確に意識・定位されるのは、俊成の「うたのほんたいには、たゞ古今集をあふぎ信すべき事なり」（『古来風体抄』）の揚言まで待たねばならない。『後撰集』における『古今集』が、どのような意味を持つものであったのかは、さらなる検討が必要となるが、敬意や尊崇が垣間見えるとしても、古典意識が明確に存在する段階ではなかった。いまだ本歌取りを支える理念や歴史意識、古典意識が成熟しない段階ではあるが、引用の意識が作者・読者の双方に存在し、「本」の表現を意識的に自詠に取り入れ、読者に対して一首全体を想起した上で〈本〉との対比や重なりを意識した読解・解釈を求め、またそれが可能であったのが『後撰集』時代の〈本歌取り〉だった。そのため本歌取り技法の発生期としては重要な時期である。

但し、『後撰集』時代の〈本歌取り〉が、詠歌の状況と不可分な機知の発露としての評価だけではなく、和歌として後世に評価を受けたものがあつたことにも目を向けておきたい。⑧の『斎宮女御集』84番歌は、後に『新古今集』（恋三121）に「天曆御時、まどほにあれやと侍りければ」の詞書で入集している。久保田淳『新古今和歌集全注釈 四』（角川学芸出版・二〇一四年）の1210番歌鑑賞には、「聡明な返事のし方、優雅な王朝の会話乃至（ないし）は消息の一つの典型であろう」と評されており、『新古今集』に採られた理由として、王朝時代の後宮における優雅なコミュニケーションとしての評価があつたと考えられている。但し、この⑧は『俊成三十六人歌合』56、『時代不同歌合』165、『女房三十六人歌合』20にも採られている。これらの秀歌撰では、詞書は付されていない。即事性から切り離し、古今歌の本歌取りという読解・享受の方法においても評価されたことが窺われる。



『後撰集』の〈本歌取り〉に見る露わな表現撰取、〈本歌〉に依存した和歌の詠歌方法や表現は、公任の『新撰髓脳』の記述と照らせば、コミュニケーションの場を離れ、和歌そのものの出来を評価する上では、平安時代後期にはオリジナリテイーの欠如した安易な詠歌方法と低く見られたものだったと推測される。但し、一首の完成度や出来を問う歌合や題詠においては避けられた、先行和歌からの詞続きの撰取は、詞書や題にたよらずとも先行和歌の内容を喚起させつつ、自詠に二重性をもたらす引用のレトリックとして働いている。古典意識の未成熟な段階においては評価が低かったとしても、新古今時代の本歌取りの先駆けとしても注目されるものである。

和歌本文・歌番号は、特に記さない限り、私家集は新編私家集大成に、その他は新編国歌大観に依る。その他の引用は以下に依る。『後撰集』…冷泉家時雨亭叢書3 『後撰和歌集 天福二年本』（朝日新聞社・二〇〇四年）、『古今集』…同2 『古今和歌集』（朝日新聞社・一九九四年）所収嘉禄二年本、『俊頼髓脳』…同79 『俊頼髓脳』（朝日新聞社・二〇〇八年）、『古来風体抄』…同1 『古来風体抄』（朝日新聞社・一九九二年）、『斎宮女御集』…同17 『平安私家集四』（朝日新聞社・一九九六年）、『兼輔集』…同65 『資経本私家集一』（朝日新聞社・一九九八年）、『陽成院一親王姫君達歌合』…陽明叢書『平安歌合集下』（思文閣・一九七五年）十卷本類従歌合、『新撰髓脳』…日本歌学大系（風間書房）、『近代秀歌』『詠歌大概』…新編日本古典文学全集87 『歌論集』（小学館・二〇〇一年）、『枕草子』…新日本古典文学大系（岩波書店）

注

(1) 国立大学法人 総合研究大学院大学学術情報リポジトリ ↓ 120 教材 ↓ 10 特別講義から公開。URL: <https://ir.soken.ac>.

jp/?action=pages\_view\_main&active\_action=repository\_view\_main\_item\_detail&item\_id=5077&item\_no=1&page\_id=29&block\_id=155

- (2) 田中裕『後鳥羽院と定家研究』（和泉書院、一九九五年）第七章「定家における本歌取——準則と実際と——」、赤瀬信吾「本歌取り・本説・本文」（『国文学』30—10、一九八五年九月）、川平ひとし『中世和歌論』（笠間書院、二〇〇三年）13「本歌取と本説取——〈もと〉の構造」、佐藤恒雄「本文・本歌（取）・本説——用語の履歴」（『国文学』49—12、二〇〇四年一月）、『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、二〇一四年）「本歌」項目（執筆・渡部泰明）
- (3) 中川博夫『中世和歌論 歌学と表現と歌人』（勉誠出版、二〇二〇年）序論I「中古「本歌取」言説史論」
- (4) 注(2) 田中著書
- (5) 成立時期については、萩谷朴『平安朝歌合大成 増補新訂 第一卷』（同朋舎出版・初版一九五七年・増補新訂一九九五年）「二八 延喜廿一年〔五月〕京極御息所褒子歌合」の「成立名称」で考証されている。
- (6) 注(5) 萩谷著書
- (7) 萩谷朴『平安朝歌合概説』（私家版・一九六九年）第二章第十一節（ハ）「本歌返し之歌合」
- (8) 峯岸義秋『歌合の研究』（三省堂出版・一九五四年）第三編第二章二「本歌取形式の歌合」
- (9) 注(5) 萩谷著書「史的評価」
- (10) 菊地仁『職能としての和歌』（若草書房・二〇〇五年）第一章第一節「〈本〉の思想——院政期歌学史粗描——」
- (11) 久保木哲夫『折の文学 平安和歌文学論』（笠間書院・二〇〇七年）所収「贈答歌の方法」、増田繁夫「贈答歌のからくり」（和歌文学の世界10『論集 和歌とレトリック』（笠間書院・一九八六年）所収）
- (12) 鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版会・一九九〇年）第一篇第五章「相聞歌の展開」
- (13) 西下経一『日本文学史講座第四卷 平安時代前期上』（三省堂・一九四二年）第二章第十一節「後撰和歌集の形態と情緒」、片桐洋一『古今和歌集以後』（笠間書院・二〇〇〇年）II「後撰集」の本性、樋口芳麻呂『後撰集』の贈答歌」（『三代集の研究』（明治書院・一九八一年）所収）

- (14) 第三句「きえもせて」、二荒山神社宝蔵本・烏丸切では「きえなくて」。
- (15) 渡部泰明『中世和歌史論 様式と方法』（岩波書店・二〇一七年）第三篇第三章「古来風躰抄」における『万葉集』の抄出
- (16) 村川和子「引歌の発生、育生期における表現技巧——伊勢物語、土左日記、宇津保物語、落窪物語を中心に——」（『国文目白』9、一九七〇年一月）
- (17) 森本元子『私家集と新古今集』（明治書院・一九七四年）第二部第一章「斎宮女御集の一歌群をめぐる」に、『斎宮女御集』三類本（正保版本）14、23の歌群に、詞書に短い詞句が置かれ、その詞句が『古今集』『後撰集』の一節であるという指摘がある。
- (18) 杉谷寿郎『後撰和歌集研究』（笠間書院・一九九一年）第四章第一節「村上天皇と後宮」
- (19) 講談社学術文庫『枕草子』（上坂信男他校注、講談社・一九九九年）
- (20) 但し、『村上御集』『斎宮女御集』に見られる引歌は、『古今集』入集歌だけではない。『斎宮女御集』66番歌に付加された「たれにいへとか」の一句は、『古今和歌六帖』第四・2097番歌「世の中のうきもつらきもかなしきもたれにいへとか人のつれなき」に依る。
- (21) 注(13) 片桐著書Ⅱ三「後撰集」の表現
- (22) 高木市之助『古文芸の論』（岩波書店・一九五二年、高木市之助全集第六卷〈講談社・一九七六年〉に収録）所収「短歌の古代性」
- (23) 鈴木日出男『古代和歌史論』（東京大学出版会・一九九〇年）序第一章「和歌における集団と個」
- (24) 佐藤明浩『院政期和歌文学の基層と周縁』（和泉書院・二〇二〇年）Ⅲ部第二十二章「古歌」の再生ということ
- (25) 藤平春男著作集2『新古今とその前後』（笠間書院・一九九七年）Ⅱ三「本歌取」
- (26) 松村雄二「本歌取り考——成立に関するノート——」（『論集 和歌とレトリック』〈笠間書院、一九八六年〉所収）
- (27) 注(2) 川平著書